

「大正の奇人」 宮武外骨
—宮武外骨における「奇人」という概念—

京都大学大学院文学研究科博士課程

イヴァン・ディアス・サンチョ

(Iván Díaz Sancho)

はじめに

本論は風刺ジャーナリストおよび大衆文化研究者の宮武外骨（1867－1955年）を対象として、とりわけ大正時代以降の彼の活動を中心に、彼が「奇人」と呼ばれたことの意味を考察するものである。さらに、外骨を大正文化の先駆的存在にとらえ、江戸時代から日本文化の中に見られる「奇人」の系譜をあぶりだす目的もある。また、宮武外骨の活動において「奇人」と反骨精神とは繋がっているので、その繋がりの必然性の考察も試みる。本論によって、宮武外骨とはただの風変わりな人物ではなく、その奇抜さの根底には、流行や権力が生み出すメインストリームに抵抗する「奇人」の思想家の系譜が見てとれることが、明らかになるであろう。

1. 外骨という人がいた！

宮武外骨は四国讃岐阿野郡出身、庄屋の子供で、自分で穢多、いわゆる部落民の子孫であることをしばしば宣言していた。本名は亀四郎であったが、18歳の頃、「亀四郎」を「外骨」と改名する。「外骨」は中国の『康熙字典』（こうきじてん）の「亀」の項に、「亀外骨内肉者也」（亀ハ骨ヲ外ニシ肉ヲ内ニセル者也）とあることによる。戸籍上も「外骨」となっており、「御本名は何ですか」とよく聞かれたので、「是本名也」という印を作り、パフォーマンスのようにこれを用いていた。

若い頃は、操觚者、現代で言う記者となる夢を抱き、明治の滑稽風刺新聞『团团珍聞』をモデルに、21歳にして『頓智協会雑誌』を発行し成功を収めた。しかし、その成功は筆禍事件以降のことである。『頓智協会雑誌』の28号の中で大日本帝国憲法発布をパロディ化して不敬罪に問われ禁錮3年の実刑判決を受けた。その時から、外骨の反骨的な人生が始まり、一生で4度の入獄と29回までにわたる罰金・発禁を経験した。監獄は若い外骨にとって大学のようなものとなり、彼を反権力の猛者として目覚めさせた。吉野孝雄がすでに指摘したように、往々にして反政府活動の罪人に罰則を与えることが、かえってその反

政府意識を助長させることになるとは皮肉なものである。老齡の宮武は次のように顧みている。

このことがなかったならば、単なる天性流露、直情径行の楽天主義者、穩健な風刺ジャーナリストとしておわったかもしれなかったのに、このことあって以来、余は藩閥官僚政治の専断横恣は断じて許すべからずと感じ、新聞に雑誌にこれを極力攻撃し、藩閥官僚と連なる資本家の悪辣さに就いても仮借なき筆誅を加えて来たのであった（吉野,1980,51-52頁）。

また、その反骨的な側面に加えて、外骨は江戸時代の研究に基づいて、猥褻な主題を扱うことによっても奇人としてよく知られていた。しかし本論では、猥褻や反権力の話は詳述せず、奇人であること自体の意味を探求する。

2. 「大正の奇人」

大正14年に民俗学者の南方熊楠は『履歴書』の中で、次のように主張している。

大庭柯公が6年ばかり前、『日本及日本人』に書きたるものには、宮武外骨と故小川定明と小生を大正の三奇才兼三奇人と有之しと覚え候。(略)小生は決して左様不思議な人間に無之候(南方・柳田,1981)。

そうして、その次に南方が「不思議な人間」ではないことを証明するために自らの「履歴書」を語っていく。さすがに「奇人」と呼ばれたら嫌がらない人はいないだろう。しかし、それは宮武外骨の場合は当てはまらない。茶化すことの好きな彼は、「奇人」と呼ばれることを嫌がるどころか、それに誇りすら感じていた。南方によると、1925年(大正14年)から6年ぐらい前に『日本及日本人』という雑誌の中で、ロシア研究者兼新聞記者として知られていた大庭氏が彼らのことを「大正の奇人」と呼んでいるとあるが、南方の記憶違いか、筆者の調査不足か、大庭柯公によるその発言を見つけることは出来なかった¹。ただし、『日本及日本人—秋季臨時増刊』1921年(大正10年)9月20日の特集号「現代人物一百人」の中で宮武外骨の略歴が書かれてあって、南方が言う表現に近い言葉が出てくる。だが、その記事は匿名批評子なので、大庭柯公が書いたかどうかを確かめることができない。

日本国中外骨君のような奇態な才人は恐らく一人もあるまい。(略)今は死んだ新聞記

¹1918年から1921年(大正7年から10年)まで『日本及日本人』で大庭柯公が頻繁に寄稿している。大庭景秋の署名としても書き、ロシアやシベリア研究、日本の政治、「朝日新聞」の歴史など雑事を書いている。宮武外骨の名前が出てくるのは、1918年(大正7年)3月1日の725号と1919年(大正8年)1月15日の748号である。前者の場合、外骨とともに南方熊楠の言及もある。それ以外筆者は南方の言う言葉が見つけられなかった。

者の小川定明、今は紀州の山奥にくすぶって居る南方熊楠、それから失禮ながら我が外骨君を以て、自分だけは天下の三奇才兼三奇人と敬服して居るものである（政教社,1921）

大庭柯公は『日本及日本人』の常連の寄稿家であったので、この文も彼のものである可能性が高い。それでも、正しい表現は「大正の三奇才兼三奇人」ではなく、「天下の三奇才兼三奇人」である。確かに三者とも大正時代に生きていた人であるが、南方熊楠（1867-1941(慶応3年—昭和16年)）、宮武外骨（1867-1955(慶応3年—昭和30年)）、小川定明（1855-1919(安政2年—大正8年)）、3人とも江戸末期の生まれであるので、「大正の三奇人」と彼らのことを呼ぶ名称には多少無理があると考えられる。しかも、宮武外骨は大正元年に46歳であったことを考慮すれば、大正の奇人というより、明治の奇人と命名した方が適切ではないだろうか。まさに、明治36年5月に出版された『明治畸人伝』の中で宮武外骨が俳人の正岡子規とともに滑稽家として48人のリストに含まれている（阪井,1936）。それにもかかわらず、大正14年の『大正畸人伝』（鳥谷部,1925）にも宮武外骨が夏目漱石やアナキスト渡辺政太郎のような人物とともに「廢姓外骨」という名前で現われてくる²。それではなぜ宮武外骨は「明治の奇人」の代表として残らず、南方熊楠が使う「大正の奇人」という呼び方が時代とともに優先されてきたのだろうか。

「大正の三奇人」と同じような名称として「寛政の三奇人」が存在したことは興味深い。寛政の三奇人は、江戸時代の寛政期に活躍した、傑出した人物三人のことを指している³。ここは、「奇」が「優れた」という意味であり、「奇妙な人物」という意味ではないが、宮武外骨の場合は、間違いなく「優れている者」に限らず、「変人」の意味も含まれている。それゆえに、宮武外骨は「寛政の三奇人」のような知識人というより、大庭柯公が次の文章に指摘するように風来山人と呼ばれていた平賀源内の奇人系譜にあたると考えられる。

もし大正の御代に源内が生存していたと想像して見ると、かなり趣味の広い働きをやったかも知れぬ。まず世界的植物学者として、紀州の私学者南方君と共に帝大学者を罵倒し、芝浦の埋立地に平賀式飛行機製作所を建て、珍本珍説研究者として宮武外骨君と交を結び、別に団々珍聞を復興して、盛んに風来山人一流の譜謹を弄して一世を嘲罵し、ある時は帝大心理学会の研究題目となり、晩年半狂（ようきょう）より真狂となって、ついに巢鴨御殿へ収容されて、蘆原將軍の隣房に余生を送るなどは、け

² 大正10年4月創刊の『一癖随筆』第1号に「廢姓広告」を掲載、種族や家系の重きを生み出す差別に対して「人類が各々「名」という符号を付けて居る事は、相互に便宜であり必要であるが、「姓」とか「氏」とか無くても好いものである」と宣言し、以後「廢姓外骨」を自称する。

³ 「寛政の三奇人」は世論家の林子平経、尊皇思想家の高山彦九郎と儒学者の蒲生君平である。

だし我が放屁論の作者、源内先生の本意であろう（大庭,1918,253 頁⁴）

確実に「大正の三奇人」はただ「寛政の三奇人」という言い方の対照として作られたに違いないが、なぜ明治時代の代表的なジャーナリストが明治時代の奇人ではなく、大正時代のそれとして知られているのか。確かに「天下の三奇人」の方がふさわしいであろうが、大庭柯公や南方熊楠と同様に、様々な人の想像の中では、宮武外骨は間違いなく「大正の奇人」なのである。それは、宮武外骨という人物が大正時代の精神的な変化にとっての先駆者になり、デモクラシーを始め大正の価値観の代表だったからである。

次に、奇人であることはどのような意味を持っているのかについて考察していきたい。

3. 「奇人」の意味

1916年（大正5年）元日に『日本及日本人』第671号の中の「百人百字観」で、「奇」の項目が記されている。宮武外骨が担当していれば一番適切であろうと考えられるが、文章を読むと石橋臥波という人が「奇」について「未だ説明の出来ないものを意味する」、いわゆる謎（Riddle）と不思議（Wonder）を指すと主張して、その理論を「奇」から「夢」に移していく。「遠く原始時代から、今日の文明時代にかけて、最も不思議なものとせられて居るのは、恐らく夢の現象であろう。」つまり、「奇」を説明することより、「夢」の現象について論じて、「奇」の意味をただ従属のものとしている⁵。

本論で扱う「奇人」を明らかにするため、前述したような説明が足りない。宮武外骨に当てはまる「奇人」は夢と関係なく現実的社会的な側面を持たなければなるまい。さらに「奇人」とは常人から外れた（eccentric, outsider）者でありながら、優れた者でもある。

古い昔から、畸人の役割は認められていた。畸とは、たとえば区画整理して田圃^{たんぼ}を作っていくとき出てくる切り余りのこと。一定の規格からはずれたものをいい、いつしか世間からはみだし者を畸人と呼ぶようになった。とって誤解してはいけない。

畸人は世間から馬鹿にされる存在でなく、畏敬されていたのである（伴蒿,1981,17 項）。

その発想は『莊子』の大宗師篇まで遡ることができるし、江戸時代の後期から、異端として排斥された『莊子』の思想の回復とともに、「奇人伝」の好みが現われてくる。もっと

⁴ 大庭柯公『其日の話』春陽堂、大正7年10月。元々この文章が「三都是非」という題名で出版された。『日本及日本人』第725号、大正7年3月1日、88項

⁵ 同じ第671号で、宮武外骨は「醜」の項目を担当し、そのきっかけで『日本及日本人』を発行する政教社という国粹主義的文化団体を批判し、次の宣言をする。「忠孝愛国を粧う美論、臭骸汚点を粧う美人、慈善公益を粧う美学、これを悉く醜論、醜人、醜学と見てもよい、我輩は真善美を美と感じ、偽悪醜を醜と感じない者ではないが、それよりも虚偽の真善美を醜中の最も大なる醜と感ずる者である」

も代表的なのは伴蒿蹊が書いた『近世畸人伝』である。そして、村上護によると、同時代は「上田秋成のような自覚的畸人の登場ということになる」（伴蒿,前掲書,17項）。

まさしく宮武外骨はその「自覚的畸人」の系譜に属している。大正6年7月18日に『つむじまがり』の章「予は危険人物なり」の中で宮武外骨は次のように書いている。

奇を衒う者は真の奇人でない、真の奇人は天稟天性の旋毛曲がり、科学的神秘的に発達した者でなければならぬ、それで自然に価値ある風刺、価値ある滑稽が産出するのである、世は自ら旋毛曲がりを以て任じ、其ヒネクレ根性を一代の生命として居る者で、予自らは真の奇人と信じて居るのである（宮武,1917,1頁）。

この文章を読むと、真の奇人と偽の奇人という二つの種類があることが興味深く、さらに奇人になるためには科学的で神秘的な精神を持つ必要があるという記述に驚かされる。そして、その変わった組み合わせによって、自然にユーモアや滑稽さが生じるというのだ。確かに、よく考えてみるとその組み合わせはそれほど不思議ではなく、昔から科学と錬金術、文学と芸術に興味を持つ知識人像にも当てはまる。まさに、宮武外骨のような人物は明治維新の文明開化によって取り入れられた実証主義の見解を反撃し、合理的である科学者の真面目さを打破し、固まった精神が画く直線をパロディの渦巻線に変えてしまうのだ。

同時代フランスでは作家アルフレッド・ジャリがパ「タフィジック」という神秘的なえせ科学・擬似哲学的な思想を創造した。ジャリによるとパタフィジックとは「想像上の解決の科学」である。そして、その造語によってジャリは形而上学を嘲笑しながら、19世紀末の科学の理論や方法をパロディし、20世紀初頭から流行になったナンセンスの趣向を先取した。なお、ジャリがパタフィジックの象徴として選んだのは、まさに渦巻であったことが興味深い。時代の空気であろう。宮武外骨と同様に、ジャリは「奇人」もしくは「旋毛曲がり」の代表者だと言っても良い。⁶確かに、宮武外骨の様々な雑誌をめくると、パタフィジックに近い擬似科学と聞こえる猥褻やスカトロロジーを使う言い回しがよく現れている。また、読者にとって、その文章が真面目なものか、あるいは冗談なのか分からない場合が少なくない。そこに、宮武外骨の独特な語り口が見られる。それは、しつこさによって読者を圧倒することである。たとえば、『スコブル』という雑誌の1号の中で「地球と血球」という記事では、科学の話と神秘的なアナロジーを用いて、宇宙の総てが丸いという説を組み立てる。しかし、それに留まらず、記事の上の欄の中に同じテーマについてまた説明を加える。それによって、直線というものが科学の想像でしかないことを示唆している。

⁶ 興味深いことに、外骨もジャリも自転車という近代の発明の情熱的なファンだったし、外骨は日本で初めて自転車に乗っていた日本人であったことを自分で記している。ここにもまた奇人の性格が現れて、「奇は新なり」に当てはまるであろう。

宇宙内の物体は総て丸い者である（略）総ての動物の目は丸く、鼻の穴は丸く、耳の穴も丸く、食物を呑み込む咽は丸く、廃物を排泄する肛門が丸く、男性の睾丸、女性の子宮も丸い、それから丸い子が生まれて丸い乳豆を吸ふて丸く成長する(宮武,1916,10頁)。

しかしそれはただの遊び、ただの駄洒落どころか、パタフィジックのようにユーモアを通じて、どこかで人間の深い真実が表現されている。作家レーモン・クノーはパタフィジックを「矛盾と例外の事実に基づいて」あるものと述べている。外骨も『スコブル』の中で「例外にも理あり」と述べ、前述した「地球と血球」では馬鹿げた説を通して、人類の本質的な精神を探り出す。

地球と血球...大観と小観（略）大きく見て、我々が今棲息して居る此地球は、宇宙大動物の胴体に属する一つの血球であるかもしれない、其血球の中に棲んで居る我々は、宇宙大動物の眼には見えないで、地球全体を白血球の一つぶ位に見て居るかもしれないと思った事である、イヤ思った丈でなく、宇宙無限の洪大から云へば、それが事実でなければならぬ（宮武,前掲書,10項）。

この文章に出てくる「地球と血球」「大観と小観」「大きく見て」などのような表現は、総てがパースペクティブ、つまり見解の問題に基づいていることを示唆している。そこにも宮武外骨の独特な手段を見抜くことが出来る。その一例として、明治時代に宮武が編集していた絵葉書を挙げてみよう。宮武外骨のもっとも有名な雑誌は『滑稽新聞』であった。『滑稽新聞』の別冊定期増刊として1907年（明治40年）に『絵葉書世界』を創刊した。各号が風俗・世相風刺漫画やエログロ・ナンセンス調、江戸戯画調、外国漫画など多色刷りのイラストで構成され、63×93cmの八つ折りされた厚紙に印刷されていた。切り離すと絵葉書として使える仕組みだ。2年間に渡って毎月発行され、26集販売された。全部で780種ある絵葉書は何人かの風刺画家の協力によって支えられていた。その画家の殆どは無名、もしくは匿名の作者であったが、中には大正時代に成功を収め、後に有名になる竹久夢二も居た。絵葉書の内容としては、普段気にも留められない現象を画いたり、失礼で見せられないものを見せたりするなど、あたかも観点を変えることだけで世の中の行動は風俗的にもなり、滑稽にもなるとでも言いたいかのようだ。そしてその遊び心からは、近代性が生まれもする。例えば、「探梅の風流翁」と題名された絵葉書を見て、20世紀の前衛芸術を思い浮かべるのは私だけではないはずだ。ただ一つの絵で二つのシーンが見える仕組みになっている。画面には同心のサークルが画かれ、円の中で交互に翁の姿と梅の姿が現れる（図1）。パタフィジックに属していたウリポというグループの画家たちの作品も連想される。むろん、その近代性は浮世絵の伝統にも見られるし、浮世絵研究にも夢中だった外骨はただの流行になびくはずはない。その証拠に大正時代に西洋風流行を愛用する日本人に

対して度々批判をしていた事実が挙げられる。

日本の浮世絵を日本人が研究せず、外国人の知識を日本人が丸呑みにして嬉しがって居るのは、スコブル馬鹿らしい事で、尚「これは舶来よ」と云はないだけに其罪が深い（宮武,前掲書,7項）。

こうした批判の中にも、「奇人」であることの意味が隠されている。奇は価値であるが、流行とか人並みとかは俗の極みであって、外骨にとって軽蔑の対象であった。

抑も此世では奇人と凡人と何方が最も必要であるかと云ふに、社会組織の経線から云へば凡人が必要であり、緯線から云へば奇人が必要である、即ち社会の形成は凡人の努力が基礎と成り、社会の進歩は奇人の活躍が根底となるのであって、此二者に優劣は無い、そして凡人は何時も同一径路を歩み、奇人は同一径路を歩まない、これを物質的に云ふと、汽車や電車は同一径路を走る凡人の格であって、飛行機や山河跋涉の徒歩旅行者は奇人の格である、凡人は安全であって、奇人には危険が多いのも此理によるのである（宮武,1917,2頁）。

奇人は「探梅の風流翁」のように、優れている人物でありながら、世俗から離れて、趣味の道に遊ぶ人物でもある。従って、進歩とは科学的で明治に行われた形としてだけの文明開化のような進歩ではなく、神秘を含む知識の開花、つまり文化の進歩にもあてはまる。まさにそういった意味で、宮武外骨の精神は大正時代の本質を代表する精神とも重なりあっているであろう。そして、宮武外骨は「奇人」の説を極め、奇の崇拜に至る。大正3年5月10日に『奇』という雑誌の創刊で次のように書いてある。

奇とは何ぞや、曰く新なり、異なり、隻なり俗に遇せざるなり、(略)宇宙の萬有は奇に始まりて奇に支配せらる、太極(理體)は絶対の奇にして、陽儀は相対の奇なり、相対の奇終に複数の常となりたるもの之を文明と称す。故に奇は衆妙の門にして文明の淵源なり(宮武,1914,1頁)。

雑誌『奇』は宮武外骨によって「興味雑誌」と名付けられ、奇人と凡人の区別は、凡人と違って奇人が科学や神秘に対して興味を持っていることにある。言い換えれば、奇人は「好奇心」に溢れることで、斬新なものや珍しいものを好んで、骨董および考古学的な趣味まで育んでいる。それは、明治から大正まで宮武外骨が編集した多様な雑誌を物語っている⁷。『骨董雑誌』、『骨董協会雑誌』、浮世絵研究雑誌の『此花』、『日本名物画報』、『猥褻と法律』、『男性と女性』、『穢多(新平民雑誌)』、『廃物利用雑誌』等などがそれである。

斯くの如き諸種の奇に接せんことを欲するは我々人類の天性に於いて好む所なり、其

⁷ その好奇心論がきっかけとなり柳田国男が外骨のことを「俗士の好奇心をそそるために学問を悪用する」人物として毛嫌いした(吉野 1995)。

天性之を好奇心と云ふ

好奇心とは智力的興味を得んとする心理作用にして即ち知識を欲求する感情なり（宮武,前掲書,1頁）

また、好奇心を具体化することが本当の進歩であって、19世紀末の進化論と進歩主義に反して、好奇心は凡人と奇人の優劣とそれに由来する差別を生み出さない。前に引用した外骨の『つむじまがり』の文章を繰り返すと、「社会の形成は凡人の努力が基礎と成り、社会の進歩は奇人の活躍が根底となるのであって、此二者に優劣は無い」（宮武,1917,2頁）。

そうだとしたら、進歩はどうやって生まれるのであろうか。外骨自身は奇人と凡人それぞれの好奇心を対立させることによって、それに答える。

故にこの好奇心の発達せし人種と、其しからざる人種とが、文明人とよばれ、野蛮人と呼ばるる懸隔を生ずるに至りしなり、同じ文明国人中に賢人遇人、偉人俗人の別あるは、要するに其人の好奇心の強弱に基因するなり

奇異の事物に屢々驚かされたる国が文明となり、自ら進んで奇異の事物に接せんことを欲する人が智者となり仁者となり勇者となり、其三者の数が増加してついに国が開花し進歩して文明となるに至るなり（宮武,1914,1頁）

おわりに

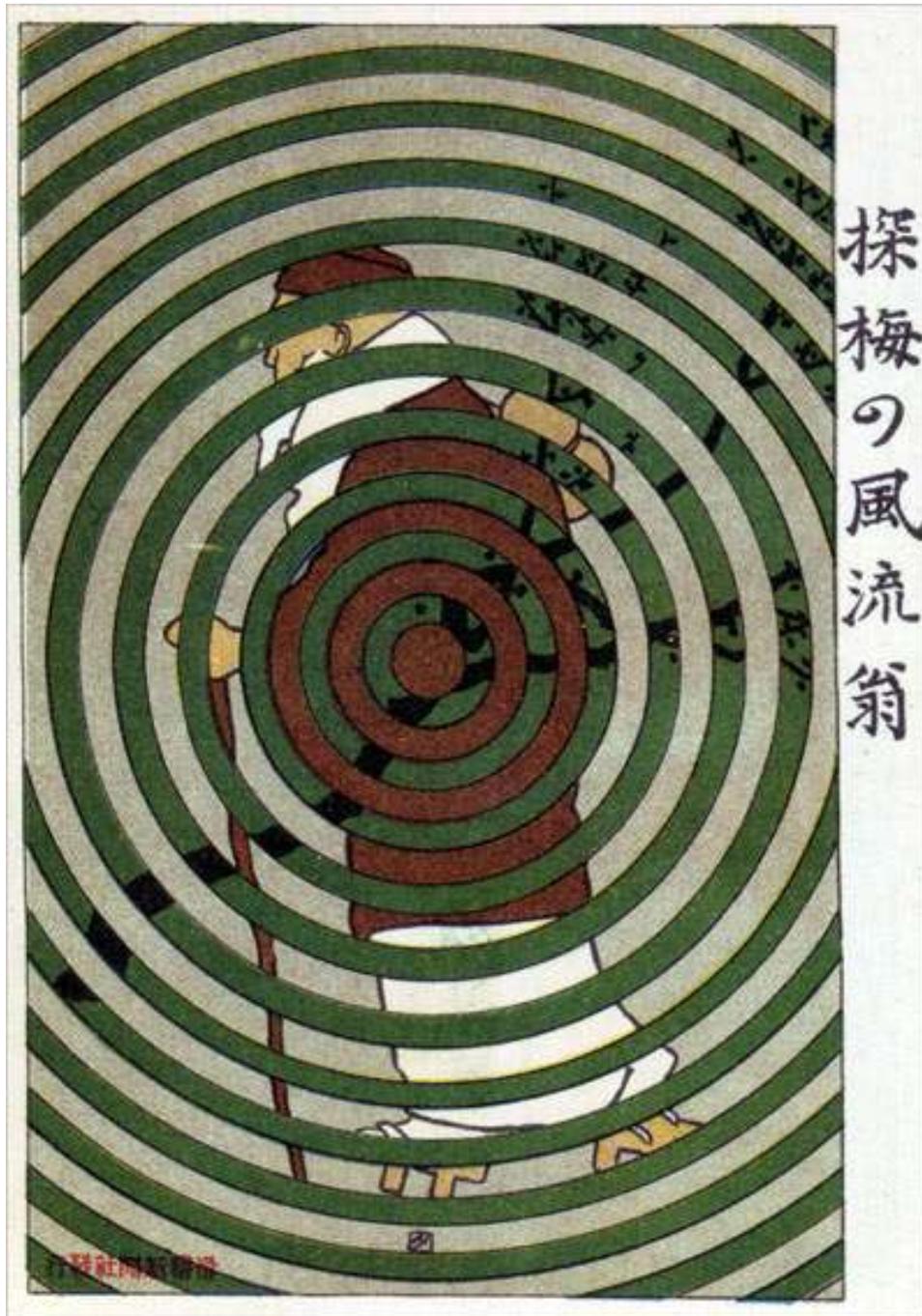
上のような説は無茶苦茶なのか、合理的な博愛主義になのか判断しがたいが、そこに現れる価値観は大正以降の彼の活躍を理解するために重要である。反権力者である上に、民主主義や民権を求めたり、部落差別と戦ったり、大衆文化を再評価することは、宮武外骨を「大正の三奇人」の大奇人として神聖化させるゆえんである。その旋毛曲がりな性格は雑誌『スコブル』から雑誌『赤』まで、社会主義的な運動に傾いてゆく。なぜなら、『つむじまがり』で主張するように「人道は左なり」。

我が輩は^{つむじまがり}旋毛曲りであるが、其^{その}旋毛も^{つむじ}左旋であり、大腸小腸と尿道が左旋なので、大便も小便も左旋である、鼻も少し左に曲り、根性は勿論左旋で、人が右と云へば左と云ふなど、大いに左曲りである、尚嗜好は左利であり、身代は左前である、天の運行が左旋であり、地の蔓草が左旋であるに似て居る。

斯く総てが左ネジに出来て居り、人間の行くべき道が左側であるのだから、我輩は常に左に行くのである、然るに人道でない牛馬の道を歩いたり、逆さの右側を歩く奴等は我輩を罵ったり笑ったりする、何とマー呆れた事でせう、左様なら……（宮武,1917,3頁）

最近日本の政界が右よりに、しかも平凡な政治家たちによって傾いているので、宮武外骨のような奇人を再発見する必要に迫られていると思う。

図 1



参考文献

- 赤瀬川原平,1985,『外骨という人がいた!: 学術小説』白水社
- 大庭柯公,1918,『其日の話 (江戸団扇)』春陽堂
- 阪井弁,1903,『明治崎人伝』内外出版協会
- 佐藤清彦,1992,『奇人・小川定明の生涯』朝日文庫
- 政教社,1907—1923,『日本及日本人』450号—869号、金尾文淵堂
- 政教社,1921 『日本及日本人—秋季臨時増刊』大正10年9月20日
- 鳥谷部陽太郎,1925,『大正崎人伝』三土社
- 伴蒿蹊撰;村上護〔訳〕,1981,『近世崎人伝: アウトサイダー119人』教育社
- 南方熊楠,柳田国男,1981,『履歴書、故郷七十年』平凡社
- 宮武外骨 1914,『奇』第1号、大正3年5月10日
- 宮武外骨 1916,『スコブル』1号、大正5年10月
- 宮武外骨,1917,『つむじまがり』山添平作
- 吉野孝雄,1980,『宮武外骨』河出書房新社
- 吉野孝雄編集,1985,『予は危険人物なり: 宮武外骨自叙伝』筑摩書房
- 吉野孝雄監修,1993—1995,『宮武外骨此中にあり: 雑誌集成26冊』ゆまに書房
- 吉野孝雄,2000,『宮武外骨: 民権へのこだわり』吉川弘文館